

# 火を点ず

小川未明

青空文庫



むら せきゆ 村へ石油を売りにくる男がありました。髪かみの黒くろい蓬ぼう々ぼうとした、脊せいのあまり高たかくない、いろしろうおとこ 色の白い男で、石油せきゆのかんを、てんびん棒ぼうの両端りょうはしに一つずつ付けて、それをかついでやってくるのでした。

おとこ 男は、勤勉者きんべんものでありました。毎日まいにち、欠かさずに、時間じかんも同じおなじように、昼ひるすこし過ぎすぎると村むらに入はいってきて、一軒けん、一軒けん、「今日きょうは、石油せきゆはいりませんか？」と、いつて歩くあるのでした。

おとこ その男は、ただ忠実ちゆうじつに仕事しごとのことばかり考かんがえているようでした。それには、なにか、目的もくてきがあつたのかもしれない。たとえば、金かねがいくらたまつたら、店みせをりっぱにしようかとか、また、はやく幾何いくわかになれば幸福さいわいだと胸むねの中うちに描えがいていたのかもしれない。それとも、もつとさしせまつたその日のことを考えがえていたのか？

あまり口くちをきかない、この男おとこの顔かおを見みたばかりでは、心こころの中うちを知しることができなかつたけれど、人間にんげんというものは、なにか目的もくてきがなければ、そういうふうきんべんに勤勉きんべんになれるものではなかつたのです。

おとこ もつとも、男おとこには、若い嫁わかよめがありました。年としをとつた母親ははおやもあつたようです。小ちいさな

店<sup>みせ</sup>だけで、石油<sup>せきゆ</sup>を売<sup>う</sup>るのでは、暮<sup>く</sup>らしがたたなかつたのかもしれない。

しかし、この村<sup>むら</sup>には、もつともつと貧<sup>びんぼう</sup>乏<sup>ひと</sup>の人<sup>ひと</sup>たちが住<sup>す</sup>んでいました。屋根<sup>やね</sup>の低<sup>ひく</sup>い、暗<sup>くら</sup>い小さな家<sup>いえ</sup>が幾<sup>いくけん</sup>軒<sup>けん</sup>もあつて、家<sup>いえ</sup>の中<sup>なか</sup>には竹<sup>たけ</sup>ぐしを造<sup>つく</sup>つたり、つまようじを削<sup>けず</sup>つたり、中<sup>なか</sup>には状<sup>じようぶくろ</sup>袋<sup>ぶくろ</sup>をはつたりしている男<sup>おとこ</sup>も、女<sup>おんな</sup>もあつた。それでなければ、一日<sup>いちじつ</sup>外<sup>そと</sup>に出<sup>で</sup>て圃<sup>はたけ</sup>で働<sup>はたら</sup>いているような人<sup>ひと</sup>たちでありました。

彼<sup>かれ</sup>らは、ものを問<sup>と</sup>いかけられても、手<sup>て</sup>を休<sup>やす</sup>めて、それに返<sup>へんとう</sup>答<sup>とう</sup>するだけのときすらおしんでいましたから、頭<sup>あたま</sup>だけを外<sup>そと</sup>の方<sup>ほう</sup>に向<sup>む</sup>けて、

「まだ、今日<sup>きょう</sup>はあつたようだ。」とかなんとく、その石油<sup>せきゆ</sup>売<sup>う</sup>りにいったのでした。

「また、お願い<sup>ねが</sup>いたします。」と、男<sup>おとこ</sup>は、軒<sup>のきした</sup>下<sup>した</sup>を去<sup>さ</sup>つて隣<sup>となり</sup>の家<sup>いえ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ歩<sup>ある</sup>いていくのでした。

その後<sup>あと</sup>で、家<sup>いえ</sup>の中<sup>なか</sup>では仕<sup>しごと</sup>事を<sup>こと</sup>しながら、家<sup>かぞく</sup>族<sup>ぞく</sup>のもの<sup>もの</sup>が、こんなうわさをしていきます。「売<sup>う</sup>りにくるの<sup>の</sup>と、いつて買<sup>か</sup>うの<sup>の</sup>とはたいへんな違<sup>ちが</sup>いだ。売<sup>う</sup>りにくるのは、きつちり一<sup>いっ</sup>合<sup>ごう</sup>しか量<sup>はか</sup>らないが、いつて買<sup>か</sup>うとずつとたくさんくれる。これから夜<sup>よる</sup>が長<sup>なが</sup>くなるから、夜<sup>よなべ</sup>業<sup>ぎょう</sup>をするのにすこしでも多<sup>おほ</sup>いほう<sup>ほう</sup>がありがたい、晚<sup>ばん</sup>方<sup>がた</sup>ちよつといつて買<sup>か</sup>えばいいのだ。」と、母<sup>ははおや</sup>親<sup>おや</sup>がいうと、

「ほんとうに、きつちり一合しか量らない、なんだか足りないようなときもある。きたのをかうとランプの七分めぐらいしかないが、いつてかうとちようど口もとまでありますよ。」と、娘が返答した。

これらの人々は、こうして、なにか問題が起るとたがいにくちをききあうが、それでもなければ一軒の家でも、めつたに話すらせずに下を向いて指先をみつめながら仕事をしているのでした。頭の中では、多分娘はさまざまな空想にふけりながら、また母親は別のことを頭に描いて……。

ちようどそのとき、隣家の軒下では、男は肩からてんびん棒を下ろして、四十前後の女房が汚れた小さな石油を入れるブリキの罐を手にかけて出てきました。

窓の格子には、赤いとうがらしが十ばかり一ふさにして結びつけてあります。そこにはよく日が当たるのでした。女の皮膚の色は青ざめてたるんでいた、そして、水腫性の症状があるらしくふとつて、ことに下腹が飛び出ていました。

男は、こちらの石油罐のふたを取りました。青々とした、強烈な香気を発散する液体が半分ほども罐の中になみなみとしていました。五勺のますと石油をくむ杓があつて、男はその杓を青く揺れる液体の中に差し込むせつな、七つ八つの少年

が、熱心にかんの中をのぞいて、その強烈な香気をかいでいるのでした。

「どいておくれ。」と、男は、ぶあいそうにいった。少年は、一歩退いて、目を細くして、雲切れのした秋の空を仰いでいました。

「また、油の値が上がったんですね。」と、女房はいいました。

「また、上がりました。」と、男は答えながら、五勺のますにほとんど過不足なく平らかに石油を満たして漏斗にわけました。そして、もう一杯入れるために、また、杓子を石油に差し入れました。

「こんなに石油が高くなつては、夜もうっかり長く起きていられない。」と、女房はいいました。

その言葉の調子には、こう値が上がったら、どんなに石油を売るものはもうかるだろうというように聞かれたのです。

「卸問屋のほうで値を上げるのですから、こうして売る私どもは、やはりもうからないのです。」

無口な男は、いいわけをするように、ただこれだけいいました。

女房は、こういったら、半杓ぐらい最後に、おまけを入れてくれるだろうかど、

目をさらにして、じつと見ていたのですが、男は、やはり巧妙とでもいうように、過不足なく平らかにますに入れて漏斗に移すと、それぎりでした。女は、むしろ男が早く漏斗を入れ物の口から抜いたので、青味を帯んだ、美しいしずくがまだ残っていて、かえってますに移されたのだけ損をしたような気すら起こったのです。

「ありがとうございます。」といつて、男は、その家の前から立ち去りました。

「売りにくるのを買うものでない。これからやはり、店へ行って買ったほうが得だ。」と、女房は、独り言をしながら家へ入りました。

窓の格子には、火の燃えついたように、このとき、とうがらしを日が照らしていました。先刻の男の子が、石油売りの後を追っていきました。

「僕は石油のおいが大すぎだよ。」

その子供は、友だちに出あうとそういつていました。

「かきを一つあげようか。」

友だちは、懐からかきを出して、少年に渡しました。二人の子供は、乾いた往來の上で、黄色な果実を持って楽しそうに遊んでいました。

その間に、石油売りは、圃の間を通つて、あちらへいつてしまった。

日暮れ方すこし前に、このかさをかぶつた、わらじをはいてきやはんを着けた労働者は、村をまわりつくして町に出ようとして、ある神社のそばにさしかかり、そこに荷を下ろして、しばらく休んでいました。境内の木々は黄色く色づいていました。

「寒くなつた。今年は夜着を造らねばなるまい。」

無口の若い男は、あたりのさびしくなつた景色を見まわしながらひとり語をしていました。やがて、彼は、家に帰つて、日暮れ方に近づいて店頭へくる客に、石油を量つて渡していたのです。

「歩いていつて売るときはおまげができないが、店にくる人には、すこしずつおまげをしよう。」

これが彼の心の掟となつていました。すこしでも量の多いのを喜んだ、このあたりの貧しい生活をしている人々は、わぎわぎ彼の店へやってきました。その中には、老人もあれば、若い女などもあつたが、日が暮れても、まだ仕事の手を放さない、ほんとうに一刻をも争うその日かせぎの人々は、子供を使いこらしてやるのでした。

この夜、幾百万の燭光を消費する都会の明るい夜の光景などは、この土地に住

む人々のほとんどその話を聞いても理解することのできないことであつたのです。

男は、店頭に来た、汚らしいふうをした子供を見て、どこかで見たことのある子供だと思ひました。しかし、彼は、昼間石油の罐をのぞいた子供だということは思ひに浮かばなかつたのです。

子供は、一合の石油を買つて、銭をそばに重ねてあつた空き箱の上にのせて、小さな姿は店頭から消えました。

男は、うす暗くなつた光線のうえで、箱の上にのせてあつた銭を手に取り上げて、しらべて見ました。

「なに、これは五厘錢じゃねえか、五厘ごまかそうと思ひやがつて……。」「と、いまいましそうにいつて、顔の色を変えた。

「おまけをしたうえに、ごまかされて、一合の頭でいくらもうかるけえ。」「

無口な、おとなしそうな男に似合わず、急に怖ろしいけんまくとなりました。男は、すぐさま駈け出していききました。

「きつと、貧乏村の子供にちげえない。」「

彼は、村の方に向かつて、恐ろしい勢いで走りました。小さな子供の、油びんをぶらさ

げて、短い着物のすそから出た二本の足に、ぞうりをはいていく後ろ姿を見つけると、  
「おい、餓鬼め、待て！」と、彼は、どなるとほとんど同時に、子供の後ろえりを引っ捕まえました。

もし、だれか村のものがこの有り様を見たら、あの平常口もきかない男に、こんな残忍なことができるかと、かつて想像のできなかつただけびっくりするでしょう。

「五厘ごまかそうなんて、ふらちなやつだ。」

「五厘出せ、それでなけりや、そのびんをよこせ。」

少年は、黒い大きな目をみはって、顔を真っ赤にして、なにもいえないで震えています。

「さあ、石油のびんを渡せ。」と、男は、少年の手から引つたくるとたんになわが切れて、びんは地上に落ちて、倒れると石油は惜しげもなく、口から雲母のごとく流れ出ました。

「てめえみたいなやつは、大きくなるとどろぼうになるんだ。」  
男は、小さな手で両眼をこすって泣き出した少年を後目にかけて、ののしると町の方へ引き返してしまいました。

神社の境内にあつた、いちよの葉は、黄色く、ひらひらと、すでにうす暗くなつた地の上に吸い込まれるように散つていました。少年は、いつまでも泣いていたが、急になきやんだ。そして、足もとに倒れているびんを拾つて、一目散に村の方へ走りだした。

「俺をどろぼうとிட்டぞ。」と、口走りながら。

町に、燈火のつくころでした。みすぼらしいようすをした老婆が、石油屋の入り口に立つて、

「さつき、子供が、五厘足りなかつたので、どろぼうだといつてしかられたと泣いてきたが、私が錢を渡したときに目が悪いものでまちがったのだ。まちがいということは、だれにでもあることでは……。」と、老婆は、目をしばたたきながら、主人にிட்ட。

「いえ、五厘足りないとは追いかけていつていうと、たしかに置いてきたといいなさるから、うそをいうことは、どろぼうのはじまりだといிட்டのです。」と、平常無口の男は白々しく答えた。

翌日の暮れ方のことです。男が、客のために石油を量つてみると、不意に目先で火を

すつたものがある。はつと心臓しんぞうを刺さされたようにびっくりしたときは、非常ひじょうな爆音ばくおん

とともに、もう火ひは彼かれを包つつんでいました。

少しょう年ねんの不思議ふしぎな犯罪はんざいとして、この話はなしは、いまだにこの町まちに残のこっています。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「種蒔く人」

1921（大正10）年11月

※表題は底本では、「火《ひ》を点《てん》ず」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 火を点ず

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>